

「わかる」授業へ ICT活用

グループ活動 四つの型で

動画提供／問題解決／作品づくり／発表・交流

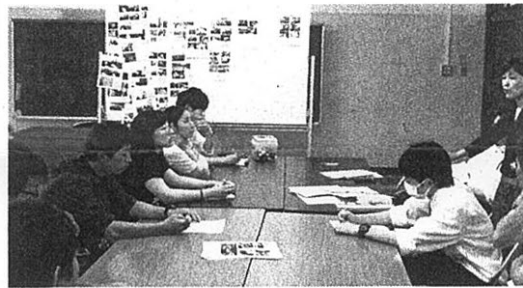
ICT機器を活用し「わかる」授業づくりに取り組む京都府長岡京市立長岡中学校(外田敏久校長、生徒541人)。これまでの実践を分類し、生徒が主体的に学びを深めていく「グループ活動」を四つの「型」にまとめた。同校は、(公財)パナソニック教育財団の特別研究指定校。身に付けさせたい力の習得を目指し、単元全体を見据えながら授業の中での効果的なICT機器の活用に取り組んでいる。

京都・長岡京市立長岡中学校

ICT研究を本格的にスタートさせたのは昨年度。同校では、まず「なぜ使うのか」「なぜ使わないのか」の二つの視点で議論を始めた。ICT機器を活用し、「グループ活動」の実践を積み重ねる中、生徒の学びに効果的だったものを四つの「型」に分類した。

①教師が問題提起としてICT機器を活用した動画などを提供し、生徒がグループ活動で問題解決をする
②生徒がグループ活動にICT機器を使いながら、問

教科が違っても共通



グループ活動の「型」について検討を重ねた

④生徒がグループ活動の結果を、ICT機器を活用して発表・交流する
こうした授業づくりに関

わる指標ができたことで、教科が異なっても共通理解を図ることができた。現在

「生徒の学びを深める上で、教師の仕掛けづくりが課題の一つ」と語る研究主任の森山結城教諭。「深い学び」は数値に表すことが難しい。目指す子どもの姿を基に、生徒が記述した部分を細かく見取っている状況だという。

「推進チーム」設け

学校全体で研究を進める上で、中学校で課題になりやすいのが「教科の壁」。教職員全体を巻き込む上で、各教科の主任らで構成された「推進チーム」を立

ち上げたのが功を奏した。担当教科の活用事例を紹介し、まずは交流することが第一歩だった。

次のステップとして、教科内でグループをつくって授業を考えていく形を取った。本年度は全教職員で一

つの授業を参観・分析するという取り組みも実施している。その際、参観者が気付きなどを記入する記録用紙(わかる、できる、協働、深い学び、対話的な学び、ユニバーサルデザインの六つの視点)を作成し、それを教師一人一人が自らの授業づくりに役立てている。

この他、研究の方向性などを周知する「研究通信」(月2回程度)を、森山研

「誰でもできる」重視

同校は来年度2月1日に研究発表会を実施し、これまでの成果や課題などを報告する。公開授業終了後、その場で事後研究会を行う予定だ。現在、11台の「iPad」に加え、既存のコンピュータ室やプロジェクト1・1171

少ない端末でも工夫次第

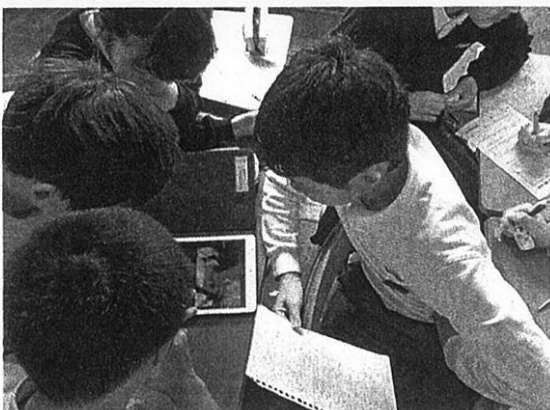
長岡中学校には、「グループ活動の仕掛けの型」などの幾つかの大きな特色がある。その中でも、特に注目したいのは「教師を育てる」という部分に力を入れているところ



浅井 和行 京都教育大学教授

である。中堅、若手教員が増えていく中、彼らが学ぼうとしているときにICT機器を教材の一つとして導入した。生徒一人一人の学力はもちろ

一クラス分しかない。また、無線LANも引かれていないため、ICTの環境は恵まれていないとは言い難い。2月の研究発表会で見てほしいところは、一人一台のタブレット端末がない学校でも工夫を凝らせば生徒一人一人の学力を伸ばせるという部分である。ICT機器を活用すれば、すぐ学力向上に直結するわけではない。教師の仕掛けに加え、学習プロセス全体から考えていけば参考になる部分も多いはずである。



「思考力」に加え、生徒たちの「表現力」なども高まっている